

オペレッタ創作による保育者としての
社会人基礎力・非認知能力の獲得に関する研究
——「すべきこと」と獲得度の認識を通して(1)——
Early Childhood educators' acquisition of basic social and
noncognitive skills through creating operettas
: An investigation of their awareness of “what should be
done” and level of skill acquisition, on Early Childhood
Educator (HOIKUSHA) Training School(Volume 1)

佐々木 友里 葛谷 潔昭

Yuri Sasaki, Kiyooki Kuzuya

はじめに（研究の目的）

私たちが勤務する保育者養成校では、創設以降、オペレッタ創作という共同作業を通して、社会人基礎力、および、非認知能力を養うことを重要視している。この能力は、表現領域の創作活動を通して、保育者として活躍するための基盤となり、グループ制作を通して社会人としての人格形成につながると考えている。この研究は、2016年度から継続しているものであり、2019年度の「保育者養成校におけるオペレッタ創作による非認知能力（社会人基礎力）獲得の学生評価のグループ討議後の変容について」の続編である。特に、本研究は、社会人基礎力の獲得の実際について、創作に取り組む学生がどのような評価をしたのか、生の声を分析、考察することを目的とする。なお、2019年度の研究報告では、オペレッタ創作を通して、保育者を目指す学生は、非認知能力、特に社会人基礎力を養うことにつながっていると高い比率で実感しているということが明らかになった¹⁾。しかし、2019年度は、本調査（グループ討議後の調査）のデータのうち、学生がランクを付けた際に記載した自由記述の分析を行わなかったため、本研究では、その内容を中心に研究を行っていくこととする。

なお、「社会人基礎力」とは、経済産業省「社会人基礎力に関する研究会」で示されたものであり、「人間性、基本的な生活習慣をベースにした基礎学力と専門知識を使いこなすことができる力」と理解でき²⁾、図1の通り「3つの力」と「12の能力要素」で構成されている。図1の通りであるが、多くの高等教育機関において、企業人、組織人として、また生産性向上のために、対人関係、業務遂行能力の獲得のための指標として用いられている。

2018年には「人生100年時代というコンセプト」を加えられ「新・社会人基礎力」として、図2の通り、従来の者に新たに「3つの視点」が加えられている。それは、①何を学ぶか：学び続ける力、「OS」と「アプリ」、マインドセットとキャリアオーナーシップ、②どのように学ぶか：統合、リフレクションと体験・実践、多様な能力を組み合わせる、③どう活躍するか：自己実現や社会貢献に向けて、企業内外で主体的にキャリアを切りひらいていく、となっている。また、同時に以前の「創造力」は、その意図も含めつつ「抽象思考力、価値判断力」の意図を追加した関係で「想像力」と表記が変更されている³⁾。

前に踏み出す力(アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力	チームで働く力 チームで働く力	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力		傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	実行力	目的を設定し確実に行動する力		柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
考え抜く力(シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	チームで働く力 チームで働く力	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力		規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	創造力(想像力)(注)	新しい価値を生み出す力(抽象思考力、価値判断力)		ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

図1 「社会人基礎力」＜3つの力と12の能力要素＞

注：2018年以降は、創造力の意図も含めつつ「抽象思考力、価値判断力」の意図して「想像力」と表記が変更されている。
出所：『社会人基礎力に関する研究会－中間取りまとめ－』、経済産業省社会人基礎力に関する研究会、2006,p.14を改変



図2 「人生100年時代の社会人基礎力(新・社会人基礎力)」

注：「想像力」は「抽象思考力、価値判断力」の意図も含め2018年以降は、「創造力」から表記が変更されている。
出所：『経済産業省産業人材政策室「人生100年時代の社会人基礎力について」』、2018,p.3]

一方で、近年「非認知能力」が重要視されている。これは、ノーベル賞受賞歴のある経済学者、ジェームズ・J・ヘックマン (James J. Heckman) が著書『幼児教育の経済学』で提唱した言葉であり、「非認知的な能力」、「社会情動的能力」とも言われる。「非認知能力」は、主に根気強さ、注意深さ、意欲、自信、長期的計画を実行する能力、他人との協働に必要な社会的・感情的制御⁴⁾といった能力で、さらに細かく示すと、問題解決力、批判的思考力、協調性、コミュニケーション力、主体性、自己管理能力、自己肯定感、実行力、統率力、創造性、探究心、共感性、道徳心、倫理観、規範意識、

公共性⁵⁾などの社会的・心理的能力のことを言う。このことから「社会人基礎力」は、非認知能力の一部、非認知能力の発展によって獲得される能力と理解することができる。ヘックマンは「幼少期の環境をよりゆたかにすることが認知的スキルと非認知的スキルの両方に影響を与え、学業や働きぶりや社会的行動に肯定的な結果をもたらす」⁶⁾「(幼少期の介入により) スキルがスキルをもたらし、能力が将来の能力を育てるのだ。幼少期に認知力や社会性や情動の各方面の能力を幅広く身につけると、その後の学習をより効率的にし、それによって学習することがより簡単になり、継続しやすくなる」⁷⁾という見解を示している。それを踏まえ、2018(平成30)年度から施行されている保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても、非認知能力が今後の保育や幼児教育で、子どもたちに獲得されるべき重要な能力として位置づけられており、それを意識した保育者養成は重要な要件となっていると理解している。

研究方法

本研究は、図3に示した通り、「卒業記念音楽発表会」として行っている、オペレッタ創作の発表後に、直後アンケートとグループ討議を行った上で、学生自身が取組を通して獲得できたことの獲得度の自己評価(ランク付け)をした際に合わせて自由記述(コメント)した根拠や理由、感想を分類集計し、その傾向を分析するとともに、2019年度に集計した、獲得度の自己評価のランク付けの傾向との比較を行うこととする。

ただし、本研究では、「前に踏み出す力(アクション)」の主体性、働きかけ力、実行力と、「考え抜く力(シンキング)」の課題発見力、計画力、創造力(想像力)の「獲得度」に限り分析し、「チームで働く力」は次回に持ち越し、本研究の結果を用いながら、次回に組織の一員としての観点を重要視した分析を試みたいと思う。

本研究をすることで、個人として能力獲得、個人としての獲得すべき能力の具体的な内容を明らかにして、オペレッタの効果や今後の指導上の課題を明確にすることを目標とする。

直後アンケートもグループ討議後アンケートも、社会人基礎力の能力要素の重要性の度合とその獲得度合(数字によるレベル)の回答を求めるものであるが、その度合を選んだ理由や感想(自由記述)については、グループ討議後アンケートのみとし、直後アンケートでは、学生の負担軽減の観点と、獲得度の自己評価と、重要度の認識の比較調査のプレテストという意味合いがあることから自由記述は設定していない。アンケート調査票は、論文末尾の資料で示した通りで、直後アンケートと討議後アンケートと共通であるが、直後アンケートでは、右側の自己評価および重要性の認識についての自

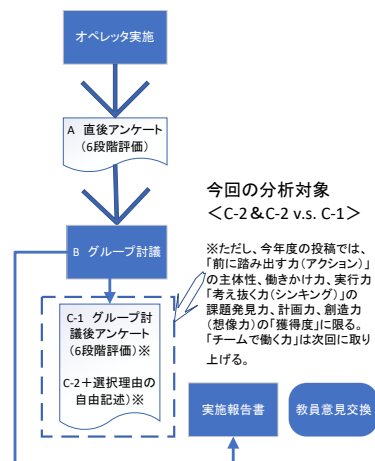


図3 本研究の分析の対象

由記述欄は使用せず、記名を求めている。なお、グループ討議後アンケートは、成績評価のため記名を求めているが、本研究に活用する際には、対象者に個人が特定されない形での集計・分析を約束している。

調査内容

A 直後アンケート調査

(ア) 調査期間：2017 年度～2018 年度の発表直後（当日～翌日）（創作発表は、1 月下旬、2 月上旬）

(イ) 調査方法：配布・回収法

(ウ) 対象者数：59 名（筆者が勤務する養成校の「音楽総合・卒業研究（オペレッタ）」の受講者）

(エ) 回収率：100%

(オ) 調査項目

社会人基礎力の「12 の能力要素」の項目ごとに、オペレッタ創作活動で「社会人基礎力」の獲得ができたかの「獲得度」と、各要素の重要性を感じたか、感じなかったかといった「重要度」をそれぞれ 6 段階で評価した。

B グループ討議

発表グループごとに、社会人基礎力の各項目の重要度、獲得度について意見交換を行った。実施時期は実施報告書提出まで（創作発表後 3 日目～2 週間以内）。

C グループ討議後アンケート調査

(ア) 調査期間：2017 年度～2018 年度の発表直後（発表後 1～2 週間以内）（創作発表は、1 月下旬、2 月上旬）

(イ) 調査方法：配布・回収法

(ウ) 対象者数：59 名（筆者が勤務する養成校の「音楽総合・卒業研究（オペレッタ）」の受講者）

(エ) 回収率：100%

(オ) 調査項目

グループ討議後、報告書作成と同時進行で、社会人基礎力の「12 の能力要素」の項目ごとに、オペレッタ創作活動で「社会人基礎力」の獲得ができたかの「獲得度」と、各要素の重要性を感じたか、感じなかったかといった「重要度」をそれぞれ 6 段階で評価し（C-1）、さらにその選択理由、根拠、感想を自由記述（コメント）してもらった（C-2）。

分析方法

上記の C-2 のうち、「前に踏み出す力（アクション）」と、「考え抜く力（シンキング）」の合計 6 つの「能力要素」の「獲得度」に限り調査結果を分類集計し、その内容を考察した。

C-2 の分類・集計の手順は、自由記述欄の内容から「1：何を」、「2：したのか、しなかったのか」に分け、1：の「何を」については、内容を、社会人基礎力の「能力要素」の意図から学生が

認識したことを前提に「a すべきこと（相応しいこと）」と「b してはいけないこと（相応しくないこと）」に分類した。さらに、その分類に基づいて、2 : の「したの、しなかったの」の項目として「c した学生」と、「d しなかった（またはできなかった）学生」に分け、a から d の分類をもとに「e すべきことができた（すべきこと・相応しいことをした）」学生と、「f してはいけない（相応しくない）ことをした」学生、「g すべきこと・相応しいことができなかった（しなかった）」学生に分け、f と g を「h してはいけないことをしてしまった（以下、h してはいけないことをしてしまったと表記）」学生として集計した。結果は、表 1 と表 3-1～3-6 に示している。

2019 年度の研究報告において集計した C-1 の 6 段階評価のうち、「前に踏み出す力（アクション）」と、「考え抜く力（シンキング）」の「獲得度」に限り「獲得度」の数値と、C-2（自由記述内）の集計で明らかになった「獲得した」とする学生の数・比率（表 2 に示す）を比較し、獲得度の実態をより深く分析、考察を行うことにした。

表 1 能力要素別 自由記述内獲得度認識 集計表（N=59）

評価	①主体性			②実行力			③働きかけ力		
	e すべきことができた	h してはいけないことをしてしまった	e もあったが h もあった（再掲）	e すべきことができた	h してはいけないことをしてしまった	e もあったが h もあった（再掲）	e すべきことができた	h してはいけないことをしてしまった	e もあったが h もあった（再掲）
人数	40(67.8%)	50(84.7%)	31(52.5%)	31(52.5%)	37(62.7%)	9(15.3%)	34(57.6%)	29(49.2%)	4(6.8%)
評価	④課題発見力			⑤計画力			⑥創造力（想像力）		
	e すべきことができた	h してはいけないことをしてしまった	e もあったが h もあった（再掲）	e すべきことができた	h してはいけないことをしてしまった	e もあったが h もあった（再掲）	e すべきことができた	h してはいけないことをしてしまった	e もあったが h もあった（再掲）
人数	47(79.7%)	17(28.8%)	5(8.5%)	22(37.3%)	45(76.3%)	8(13.6%)	41(69.5%)	25(42.4%)	7(11.9%)

表 2 能力要素別 獲得度＜自己評価ランク＞集計表（N=59）

出典：佐々木友里、葛谷潔昭(2019). 保育者養成校におけるオペレッタ創作による非認知能力（社会人基礎力）獲得の学生評価のグループ討議後の変容について、豊岡短期大学論集 No.16, p.139～152

【グループ討議後】獲得度自己評価

3つの能力		N=59							
		中央区切評価				高低レベル評価			
		低レベル①～②		高レベル③～⑤		低・中レベル①～③		最高レベル④・⑤	
		人数	比率(%)	人数	比率(%)	人数	比率(%)	人数	比率(%)
前に踏み出す力（アクション）	主体性	13	22.0	46	78.0	39	66.1	20	33.9
	実行力	12	20.3	47	79.7	45	76.3	14	23.7
	働きかけ力	18	30.5	41	69.5	41	69.5	18	30.5

3つの能力		N=59							
		中央区切評価				高低レベル評価			
		低レベル①～②		高レベル③～⑤		低・中レベル①～③		最高レベル④・⑤	
		人数	比率(%)	人数	比率(%)	人数	比率(%)	人数	比率(%)
考え抜く力（シンキング）	課題発見力	19	32.2	40	67.8	41	69.5	18	30.5
	計画力	35	59.3	24	40.7	49	83.1	10	16.9
	創造力（想像力）	19	32.2	40	67.8	34	57.6	25	42.4

調査集計結果と解釈

①主体性

「e すべきことができた」としたのが、67.8%にも上っている。全ての要素の平均との比較で高値である。なお「h してはいけないことをしてしまった」を認識した学生は、84.7%にも上る。しかし、「e もあったが h もあった」を選んだ学生は 52.5%に上り、相応しくない行動をとった学生のうち、半数は、何らかの主体性を発揮していたこともわかる。反省している故の数字と思われる。

なお、具体的に「すべきこと」として、掲げられたものの中で、一番多くの学生が「できた」としたものが「自ら行動する」「主体的にすべきことをする」で、約 7 割が自ら行動することを重要視していたことがわかる。それらのうち、後からできるようになった者が 1 名おり、オペレッタ創作の

効果を示していた。さらに、「できなかった」者を加えると、ほとんどの学生が自ら行動することの重要性に気が付いていることがわかる。他にも「自分から意見を言う」「すべきことを見つける」「積極的に声かけする」といった、周りを見て、自ら発言することの重要性に気が付いている学生が上位となっている。また「自分の弱点、状況を把握する」ことが主体性につながるとする意見もあった。

また「h してはいけないことをしてしまった」学生の場合、上記の「すべきことができなかった」のが上位だが「自分のことだけで精一杯、余裕がない」「他人に頼る」などを挙げる学生がいた。「スランプに陥る」「気分がムラがある」「考えすぎ」「自信がない」「やる気が起きない」といった、精神不安定とモチベーション低下傾向を挙げる学生もいた。また、他の人の役割を奪う、他人にやらせるという主体性の逆の価値観を積極的に行ったとする学生もいた。

表 3-1 ①主体性 自己評価コメント 集計 (N=59)

①主体性	人数	比率
e すべきことができた	12	20.3%
自ら行動する	5	8.5%
主体的にすべきことをする	5	8.5%
自分から意見を言う	4	6.8%
すべきことを見つける	4	6.8%
積極的に声かけする	3	5.1%
自ら考える	2	3.4%
自分の弱点を把握する	2	3.4%
自ら見つける	2	3.4%
周りを意識する	2	3.4%

各1人(各1.7%)

意欲的に取り組む、事実を受け止める、自分から意見を聞く、自分から意見をまとめる、授業外も練習する、すべきことを確認する、するべき時にいきる、責任を持

つ、他人のサポートをする、できることは行う、出しやばらない、自ら空き時間を探す、自ら考える、自ら調べる、みんなを引っ張る、意見を次々に出す、一生懸命取り組む、考えを見出す、指示を出す、自ら状況を把握して行動、自分の役割を果たす、全体を見る、全力で取り組む、相談して作る、中心になってまとめる、問題点を見つける

①主体性	人数	比率
h してはいけないことをしてしまった	8	13.6%
自ら行動する(できなかった)	2	3.4%
他のことを考える余裕がない	2	3.4%
自分の役割のみ取り組む	2	3.4%
人に頼る	2	3.4%
主体的に行動する(できなかった)	2	3.4%

各1人(各1.7%)
自分からしたことが結果に伴わない、自分のことしか考えない、スランプに陥る、みんなについていけない、自分ではしない、気分がムラがある、教員に助けてもらい、言われてから行動、考えすぎて行動が止まる、自信がない、主体性に欠け、周りに流される、他人に助けてもらい、他人に任せたり、流れについていく、自分から意見を言う(できなかった)、主体的にすべきことをする(できなかった)、すべきことを見つける(できなかった)、他人のサポートをする(できなかった)、主張する(できない)、進んで声かけ(できない)、制作に参加(できない)、率先して行動(できない)、演技指導を聞きのがす、分かっていても進めない、やる気が起きない、他の人の役割を奪う、他人にやらせる、するべきことの実行が遅くなった、自分のことだけする、最低限しかできない、気分がムラがある、意見を聞くだけではない

表 3-2 ②実行力 自己評価コメント 集計 (N=59)

②実行力	人数	比率
e すべきことができた	3	5.1%
自ら行動する	3	5.1%
すべきことをする	2	3.4%
考えたことを実行する	2	3.4%
どりあえずやってみる	2	3.4%
不明な点を確認しながら行う	2	3.4%
自分ができることは実行する	2	3.4%
自分のことだけはする	2	3.4%

各1人(各1.7%)

アイデアを出す、休憩しながら行う、自分の役割は果た

す、精一杯やり遂げる、他人にわかりやすく工夫する、できるだけのことやる、不安が何とかなる、他の人に相談する、本番で実現させる、やるべきことを考えて行動、優先順位をつける、練習を重ねる、演技を頑張る、決めてから行動、最後までやり遂げる、誤行確認しつつ実践、次のことを考えて行動、実行に移す、周りが動かす、進んで行動、人に見てもらい、積極的に実行、相談してから行動、仲間と協力、努力ができる、悩まないと、目標を設定する

②実行力	人数	比率
h してはいけないことをしてしまった	4	6.8%
人に言われてから行動	3	5.1%
他人と調整する(できない)	3	5.1%

自分のこと以外はできない	3	5.1%
考えるが行動しない	2	3.4%
周りに流される	2	3.4%

各1人(各1.7%)

全体を見て行動(できない)、その場に成りた実行(できない)、他人のこともする(できない)、他人への呼びかけ(できない)、完成までにはどりあえず(できない)、期限を守る(できない)、行動に移す(できない)、自分で考えて作る(できない)、主張する、進んで声かけ、制作に参加、率先して行動

②実行力

「e すべきことができた」としたのが 52.5%にも上っている。2019 年度の研究報告の 6 段階ランク別自己評価(表 2)と比較した場合、低・中レベル(①～③)を選んだのが 76.3%、最高レベル(④・⑤)を選んだのが 23.7%であることと比べると高値であり、中央ランクを境目に区分した場合の低レベル(①～②)の 20.3%、高レベル(③～⑤)が 79.7%であることと比較すると、20 ポイントほど低い。つまり、6 段階ランクとして選んだ数字の分布と学生の認識と比較すると獲得度が低く出ている。なお「h してはいけないことをしてしまった」を認識した学生は 62.7%いた。一方「e もあったが h もあった」を選んだ学生は 15.3%を占めた「相応しくない行動だけをとった」と認識している学生が、約半数弱いたこともわかる。

なお、具体的に「すべきこと」として、掲げられたものの中で、「自ら行動する」「自分ができることは実行する」「自分の役割は果たす」など、自主的な行動面を挙げているが、その中で実行する内容が、自分の責任や可能な範囲内という視野から考えての評価が約 15%いることがわかった。他に「不明な点を確認」「他人にわかりやすく」「他人へ呼びかける、相談する」「周りも動かす」

「仲間と協力する」といった、他者との関係性が実行力に関係しているとする学生もいた。また「不安だがやる」「休憩しながら行う」など、精神面、モチベーション面を考えながら、実行力を高めるという視点、「練習、試行錯誤しつつ実践する」「目標を設定する」「期限を守る」といった、事前の取り組みが重要だとする視点も提示された。なお、「h してはいけないことをしてしまった」学生の上位は、「人に言われてから行動」「周りに流される」等の受け身な姿勢を示した者が約 1 割いた。他に、他人と調整ができない、自分のこと以外はできないといった、他者との関係性の難しさ、自分のことで精一杯なことが挙げられている。

③ 働きかけ力

「e すべきことができた」としたのが 57.6%いた。なお「h してはいけないことをしてしまった」を認識した学生は 49.2%いた。一方「e もあったが h もあった」を選んだ学生は 6.8%を占め、「相応しくない行動だけをとった」と認識している学生が 4 割いることがわかる。この数字は、2019 年度の研究報告の 6 段階評価（表 2）の低レベル（①～②）が 30.5%であったことと比較しても高値である。働きかけをしていればもっとよい制作になったと考えている学生が一定数いたかもしれない。また、何らかの相応しい行動をとろうとしても行き詰まっていた可能性も考えられる。

なお、具体的に「すべきこと」として、掲げられたものの中で、一番多かったのが、「声かけをする」で、約 2 割超を占めている。「意見を出す、提案する」「指示、意見、アイデアを出す、提案する」「次の仕事を促す」等も加えると、約 4 割が他者への声掛けを通して行動を促すことを重要視していたことがわかる。その次には「他の仕事があるか聞く」「どうしたらよいか相談する」という、仕事の確認をするのが上位（約 1 割超）を占めている。他には、「自分の役割を意識する」「積極性を他人に見せる」「他の人を助ける」「自分の役割を果たした上で他を助ける」「リーダーとして責任を持つ」といった、他者への思いやりや、自分自身の責任と自覚を挙げる学生がいた。なお、「h してはいけないことをしてしまった」学生の上位は「自分のできる事だけ」「ついていだけ」「指示待ち」

「人に任せる」といった、受け身、自分のことで精一杯という傾向と、「声掛け」などの働きかけができなかったとする学生が、それぞれ約 2 割いた。他には、「あえて働きかけなかった」「特定の人のみの働きかけ」「自分の好きなことだけ」といった、働きかけに否定的な回答もあり、また「目標を失う」「周りに遠慮」「できる時とできない時がある」という回答もあり、人間関係上の課題があったと推察されるとともに、その中で心理面に揺れ動いている学生もいたこともわかった。

表 3-3 ③働きかけ力 自己評価コメント 集計（N=59）

③働きかけ力			アイデアを出す、やることを見つめる、リーダーの手を借りた、リーダーの補助、言われた事をする、次の仕事を促す、自ら仕事を見つめる、自ら働きかける、自分の役割を果たした上で他を助ける、取りまとめる、出来具合の確認をする、進めてほしい事を伝える、積極性を他人に見せる、他の仕事があるか聞く、他の人を助ける			自分のことで精一杯		
e すべきことができた	人数	比率	h してはいけないことをしてしまった	人数	比率	ついていだけ	2	3.4%
声かけをする	11	18.6%		5	8.5%	仕事の有無の確認(できなかった)	2	3.4%
仕事の有無の確認	3	5.1%	自分のできる事だけする	5	8.5%	指示を求める(できなかった)	2	3.4%
指示を出す	3	5.1%	働きかける(できなかった)	5	8.5%	各 1 人(各 1.7%) あえて働きかけなかった、自分の好きなことだけを、できる時とできない時がある、指示待ち、周りに遠慮、人に任せる、特定の人のみの働きかけ、目標を失う、意見を出す、提案する(できなかった)、次の仕事を促す(できなかった)、リーダーとして責任を持つ(できなかった)、協力を仰ぐ(できなかった)、自分の役割を意識する(できなかった)		
どうしたらよいか相談する	2	3.4%	声かけをする(できなかった)	3	5.1%			
やるべき事を行う	2	3.4%						
意見を出す、提案する	2	3.4%						
指示を受けて実施	2	3.4%						
全員への仕事の振り分け	2	3.4%						
各 1 人(各 1.7%)								

④課題発見力

「e するべきことができた」とした学生が 79.7%にも上っている。全ての要素の平均との比較で高値である。2019 年度の研究報告の 6 段階ランク別自己評価 (表 2) と比較した場合、低・中レベル (①～③) を選んだのが 69.5%、最高レベル (④・⑤) を選んだのが 30.5%であることと比べると相当高値で、低レベル (①～②) が 32.2%、高レベル (③～⑤) が 67.8%であることと比較しても、選択肢を選んだデータよりも 10%超ほど課題を発見したとする学生がいたことがわかった。なお「h してはいけないことをしてしまった」を認識した学生は 28.8%を占めた。一方「e もあったが h もあった」を選んだ学生は、「相応しくない行動だけをとった」と認識している学生が 8.5%おり、その分を引いても、2 割ぐらいが課題発見力の発揮の面では課題があったと認識していることがわかる。この数字は、6 段階評価の低レベル (①～②) が 32.2%であったことと比較しても低値で、課題意識の高さはいかに知れる。

具体的にできたこと、するべきこととして認識した内容は「改善点、自分や他人の課題を発見する」「課題意識を持つ」ことで、約 5 割の学生が認識していた。特に「改善点もしくは課題を発見する」がその半数以上を占めており、課題を発見することは重要だが、どのような姿勢が重要なかは見えてこなかった。なお「自ら課題を発見する」「自発的に行動する」「自ら考えない」「自分自身の課題を発見する」という「自発的な積極性」と「自分と向き合うこと」を合計する (重複除く) と約 7 割を占めていた。他にも「練習を重ねる」「ビデオチェックをする」「常に確認する」「課題解決策の実行する」「その都度解決する」「毎回評価反省する」「様々な角度から見る、考える」「仲間と課題を発見する、解決策を考える」といった、実践とその多角的な検証、解決を挙げる学生が合計で約 2 割いることがわかった。

表 3-4 ④課題発見力 自己評価コメント 集計 (N=59)

④課題発見力			全体を見る			のにするために考える		
	人数	比率		2	3.4%		人数	比率
e するべきことができた			各 1 人 (各 1.7%)			④課題発見力		
改善点を見える	7	11.9%	youtube を見る、うまくできる方法を見える、ビデオチェックをメンバーで行う、ビデオを観る、やっていく中で発見、やるべきことを発見する、意見交換・課題の共有をする、演技課題を発見する、何をすべきか考える、課題に向き合う、確認しながら作る、観察して伝える、繰り返し調整し考えていく、工夫点を考える、工夫点を実行し確認する、自分だけでなく他人の課題を考える、周りに気づかされる、常に意識し行動する、常に確認する、全体の一部として自分の課題をどう考える、全体的な課題を発見、他人に聞く、仲間と課題を発見する、仲間と解決策を考える、直すべきところを発見する、毎回評価反省する、問題点を見える、予算のことを考える、様々な角度から見る、様々な角度から考える、良いもの			h してはいけないことをしてしまった	3	5.1%
自ら課題を発見する	4	6.8%				自ら考えない	3	5.1%
自分自身の課題を発見	4	6.8%				課題を発見する(できなかった)	3	5.1%
意見を伝える	3	5.1%				課題を発見する(できなかった)	2	3.4%
課題を見える	3	5.1%				各 1 人 (各 1.7%)		
課題意識を持つ	3	5.1%				自分自身の課題を発見(できなかった)、問題点を見える(できなかった)、課題解決策の実行する(できなかった)、自分で見つけようとする(できなかった)、改善点を見える(できなかった)、意識を全体に向ける(できなかった)、これでいいと思う、意見が合わない、自分ことだけ発見、自分のことで精一杯、人に言われるまで気づけない、他人に頼る、目を背ける		
その都度解決する	2	3.4%						
ビデオチェックで改善点を見える	2	3.4%						
客観的に考える	2	3.4%						
自発的に行動する	2	3.4%						
練習を重ねる	2	3.4%						

⑤計画力

「e するべきことができた」としたのが 37.3%いた。他の要素との比較で一番低い値である。なお「h してはいけないことをしてしまった」を認識した学生は 76.3%いた。一方「e もあったが h もあった」を選んだ学生は 13.6%を占めた「相応しくない行動だけをとった」と認識している学生が 6 割いることがわかる。

具体的に、重要視する内容としては、「するべきこと」が「できた者」も「できなかった者」も上位だったのが「自ら行動する」「主体的にすべきことをする」「自ら計画をする」という「自発性」と

の重要性を挙げており、合計で約 8 割を占めていた。その中で「積極的に声かけする」「自分から意見を聞く」「周りを意識する」「自分から意見をまとめる」「毎回話し合う」という他者との関係性の重要性を示唆する内容は、約 2 割の学生から挙がっていた。また「事前に練習する、準備する」「先のことを考える」といった事前の準備や姿勢に関する項目を挙げる学生が約 2 割弱いた。また「h してはいけないことをしてしまった」学生に着目すると「自分のことのみする」「自ら考えない、他人に頼る」「自分のことで精一杯」「計画通りに進められなかった」「見通しを持てなかった」「目の前のことだけにはまる」「焦る」「準備が遅い」などという、「余裕がなく、自分のことだけで精一杯で、計画とその実行まで到達できず、計画の重要度はわかるが具体的な手が打てなかった」ということを示唆する内容を掲げた学生が合計で約 3 割いた。

表 3-5 ⑤計画力 自己評価コメント 集計 (N=59)

⑤計画力			指示を得て行動する			2	3.4%
e するべきことができた	人数	比率	自ら考えない(他人に頼る)			2	3.4%
自ら行動する	12	20.3%	取り掛かりが遅い			2	3.4%
主体的にすべきことをする	5	8.5%	前もって準備する(できなかった)			2	3.4%
自分から意見を言う	5	8.5%	各1人(各1.7%) その日に決める、できることを探す(できなかった)、計画を立てない、決めることが遅い、考えること(できなかった)、自分なりに計画したがミスマッチ、自分のことで精一杯、準備が遅い、焦る、制作が遅れる、積極的な関与(できなかった)、先のことを考える(できなかった)、全体としては未計画、直前に考える・決める、提出・完成が遅れる、当日に決める、目の前のことだけにはまる、優先順位をつける(できなかった)				
すべきことを見つけた	4	6.8%					
積極的に声かけする	4	6.8%					
自ら考える	3	5.1%					
自分の弱点を把握する	2	3.4%					
自ら見つける	2	3.4%					
周りを意識する	2	3.4%					
各1人(各1.7%) 意欲的に取り組む、事実を受け止める、自分から意見を聞く、自分から意見をまとめる、授業外も練習する、事前に練習する、事前準備する、常に把握する、先のことを考える、毎回計画を実行する、毎時間話し合う、様々な角度から見る、様々な角度から考える、							
⑤計画力							
h してはいけないことをしてしまった	人数	比率					
計画を立てる(できなかった)	5	8.5%					
自ら計画をする(できなかった)	5	8.5%					
自分のことのみする	4	6.8%					
計画性(できなかった)	3	5.1%					
計画通りに進める(できなかった)	3	5.1%					
無計画で行う	3	5.1%					
見通しを持つ(できなかった)	2	3.4%					
行き当たりばったり	2	3.4%					
材料の事前準備(できなかった)	2	3.4%					

⑥創造力(想像力)

「e するべきことができた」としたのが 69.5%いた。全ての要素の平均との比較で高値である。なお「h してはいけないことをしてしまった」を認識した学生は 42.4%いた。一方「e もあったが h もあった」を選んだ学生は 11.9%を占め、「相応しくない行動だけをとった」と認識している学生が 3 割いることがわかる。

学生のするべきことの認識としては、「自らアイデアを出す」「アドバイスする」などの「想像と提案」をすることを挙げたのが約 5 割を占めた。他に「理想の実行、実現」が約 2 割弱「理想のイメージを持つ」が約 1 割超「試行錯誤する」などが約 1 割超、「理想の環境」が約 7%、「仲間との関係性」を挙げたのが約 5%いた。また、するべきことができなかったとする学生には「積極性がなかった」「自分のことだけで精一杯」を示唆する学生が約 8%いた。

表 3-6 ⑥創造力(想像力) 自己評価コメント 集計 (N=59)

⑥創造力(想像力)			仲間と考え、創造する			2	3.4%	自ら考えない(他人に頼る)			5	8.5%
e するべきことができた	人数	比率	複数のアイデアを出す			2	3.4%	理想の制作の実現(できなかった)			4	6.8%
自らアイデアを出す	18	30.5%	各1人(各1.7%)					理想のイメージを持つ(できなかった)			2	3.4%
理想のイメージを持つ	7	11.9%	アイデアを伝える、アレンジをする、観察と評価を繰り返し考える、見たり聞いたりして創造する、自分で創造する(少しだけ)、全体のことを考える、仲間の力を借り・創造する、調べて情報収集して考える、理想の演技をする、理想の動きを考える					考えるのに時間がかかる			2	3.4%
理想の制作の実現	6	10.2%										
試行錯誤する	5	8.5%										
理想の環境を考える	4	6.8%										
アドバイスをする	2	3.4%										
その場に応じた想像、工夫をする	2	3.4%										
より良いものへの挑戦	2	3.4%										
論理的な考えを持つ	2	3.4%										
			⑥創造力(想像力)									
			h してはいけないことをしてしまった			人数	比率					
			自らアイデアを出す(できなかった)			6	10.2%					

考察と結論

2019年度の研究報告と同様、本研究の集計、分析においても「課題発見力」と「創造力(想像力)」の獲得度が高くなる傾向は同じだった。一方ですべきこととして意識した、重要なこととして意識した内容のうち、すべての能力要素に対するコメントにおいて、多数を占めているのが「自発性」と「積極性」を意図するコメントで、そのコメントに関連付けしながら「実行性」、「人間関係」に関する内容をコメントしていた。学生にとっては、以上の要素が重要と認識し、自己と向き合ってきたと言え、オペレッタ創作が、学生の「自発性と人間関係を育む」という効果が発揮されていたといえることができる。また、あえて本調査を行ったこと、つまり、自由記述のコメントを考えることによって、実際の場面の認識が深まり、自分自身と向き合うことにより、社会人基礎力や非認知能力に対してより具体的な認識になったと考えられる。特に、本研究ではグループ討議後の獲得度ランクの選択(2019年度の研究報告:表2)後に自由記述をした部分のデータを集計したが、具体的に記述することで、各能力要素に対する自己客観視が進み、自己課題の発見、評価の具体化・深化が進んだ結果、選択肢の数字と自由記述間の獲得度の差が生じたのだと推測される。学生は、アンケートとグループ討議を経て、グループ単位でのレポートの作成を行ったが、その際「謙虚に振り返り、反省的に自己を理解することができた」と述べていた学生がいた。また、想像力を発揮してあらゆる事象に対して、アイデアを浮かべていたにもかかわらず、主体性の発揮、働きかけの度合いが低くなり、結果的に実行するまでに至らなかった、また計画性が低く、計画の実効性・実行性も低かったと推測される結果が明らかになった。その要因としては、受け身であることとモチベーション低さ、自分のことで精一杯であること、他者との関係性が不十分であることで示されている。これは、社会人基礎力や非認知能力の重要な部分と一致しており、「オペレッタ創作」が、学生にとっては、自分と向き合うことから始まり、他者との関係性を考え、行動し、更に検証し、行動を改善し、完成度を高めていくプロセスの重要性を感じさせ、次への成長課題を認識させる教育的効果があり、「はじめに(研究の目的)」で述べたオペレッタ創作の意義(ねらい)が達成できていることを立証していると言える。

今後の課題と展開

今回集計、分析した内容には、チームで働く力(チームワーク)が含まれていない。しかし、今回対象にした内容から、その力の内容の獲得の重要性を学生が認識していると推測される内容が得られた。そこで、来年度は、以上の点を意識した分析と、新・社会人基礎力で重要視されている、振り返り、ライスステージの視点、つまり未来志向の観点からの評価を行い、オペレッタ創作と非認知能力の獲得の関係性などについて、更に学びを深めていきたい。

引用文献

- 1) 佐々木友里,葛谷潔昭 (2019) .保育者養成校におけるオペレッタ創作による非認知能力 (社会人基礎力) 獲得の学生評価のグループ討議後の変容について, *豊岡短期大学論集*, **16**, 139-152
- 2) 経済産業省社会人基礎力に関する研究会 (2006) .社会人基礎力に関する研究会－中間取りまとめ－, p.4-5 と p.5 の図を基に文書化
- 3) 経済産業省産業人材政策室 (2018) .人生 100 年時代の社会人基礎力について, (p.3)
- 4) ジェームズ・J・ヘックマン,大竹文雄解説,古草秀子訳 (2015) .*幼児教育の経済学*,東洋経済新報社,p11,17
- 5) 一般財団法人 日本生涯学習総合研究所 (2018) .「非認知能力」の概念に関する考察 ,p.5 表 2 「能力の要素」
- 6) 上記 4) p.29
- 7) 上記 4) p.34

参考文献

- 経済産業省社会人基礎力に関する研究会 (2006) .社会人基礎力に関する研究会－中間取りまとめ－, p.1～5 (2019 年 10 月 1 日閲覧)
https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/001_s01_00.pdf
- 経済産業省産業人材政策室 (2018) .人生 100 年時代の社会人基礎力について, p.1～5 (2020 年 8 月 1 日閲覧)
https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf
- 経済産業省・河合塾 (2010) .社会人基礎力育成の手引き ー日本の将来を託す若者を育てるために、教育の実践現場から、 p.005 (2018 年 10 月 1 日閲覧)
<http://www.wakuwaku-catch.com/社会人基礎力/社会人基礎力育成の手引き/>
- 一般財団法人 日本生涯学習総合研究所 (2018) .「非認知能力」の概念に関する考察
- 遠藤利彦ら (2017) .非認知的 (社会情緒的) 能力の発達と科学的検討手法についての研究報告書:国立政策研究所. (p.7)
- James J. Heckman (2006) . Skill Formation and the Economics of Investing in Disadvantaged Children.:*Science*,312,1900-1902

卒業音楽発表会から学んだこと～自己評価表

社会人基礎能力 8つの能力/ 12の能力要素		獲得できた評価	自己評価を記述
I. 前に踏み出す力(action) 一歩踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力			
1	主体性	0・1・2・3・4・5	
2	実行力	0・1・2・3・4・5	
3	働きかけ力	0・1・2・3・4・5	
II. 考え抜く力(thinking) 疑問を持ち 考え抜く力			
4	課題発見力	0・1・2・3・4・5	
5	計画力	0・1・2・3・4・5	
6	創造力	0・1・2・3・4・5	
III. チームで働く力(teamwork) 多様な人々と共に目標に向けて協力する力			
7	応接力	0・1・2・3・4・5	
8	傾聴力	0・1・2・3・4・5	
9	柔軟力	0・1・2・3・4・5	
10	状況把握力	0・1・2・3・4・5	
11	規律性	0・1・2・3・4・5	
12	ストレスコントロール力	0・1・2・3・4・5	

評価基準 ▶ 0 1 2 3 4 5
できなかった 少しかけた だいたいできた できた よくできた 完璧

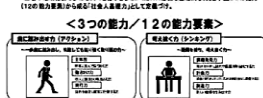
社会人基礎力とアンケート

「社会人基礎力」とは「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」です。「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの能力から構成されています。この「社会人基礎力」を意識的に育成していくことが重要とされています。保育者養成校では、オペレッタ創作活動は、保育者としての能力の獲得および、「社会人基礎力」の獲得の上で、重要だとされています。

このアンケートは、その「社会人基礎力」の学生自身の獲得の長いを評価し、「卒業研究(オペレッタ創作)」という授業科目の評価として、その力の重要性の考え方を確認するものです。

「社会人基礎力」とは

▶ 平成26年度、経済産業省では産業界の労働力不足を背景として、2020年度までに必要とされる能力として「社会人基礎力」を定義し、その育成を推進する。この能力は、社会人として働く上で必要とされる能力であり、その育成は、社会人としての能力の向上に寄与する。



学科	番	氏名
----	---	----

卒業音楽発表会から学んだこと～重要性の学び

社会人基礎能力 8つの能力/ 12の能力要素		重要性を感じたか	具体的に記述
I. 前に踏み出す力(action) 一歩踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力			
1	主体性	0・1・2・3・4・5	
2	実行力	0・1・2・3・4・5	
3	働きかけ力	0・1・2・3・4・5	
II. 考え抜く力(thinking) 疑問を持ち 考え抜く力			
4	課題発見力	0・1・2・3・4・5	
5	計画力	0・1・2・3・4・5	
6	創造力	0・1・2・3・4・5	
III. チームで働く力(teamwork) 多様な人々と共に目標に向けて協力する力			
7	応接力	0・1・2・3・4・5	
8	傾聴力	0・1・2・3・4・5	
9	柔軟力	0・1・2・3・4・5	
10	状況把握力	0・1・2・3・4・5	
11	規律性	0・1・2・3・4・5	
12	ストレスコントロール力	0・1・2・3・4・5	

評価基準 ▶ 0 1 2 3 4 5
感じない 少し感じた 大分感じた よく感じた とても感じた 強く感じた

グループ名	
グループでの自分の位置	
係りの役割についての反省	
配役名	
演技についての反省	
大道具/小道具	
衣装	
今回学んだこと	
今回学んだこと	

学科	番	氏名
----	---	----

資料 アンケート調査票

出典: 佐々木友里 葛谷潔昭(2019). 保育者養成校におけるオペレッタ創作による非認知能力(社会人基礎力)獲得の学生評価のグループ討議後の変容について. 豊岡短期大学論集 No.16.p.139～152